2014 年度点検・評価シート

Ⅰ　評価項目・担当部局

対象部局	環境創造学部環境創造学科　Faculty of Social- Human Environmentology
評価基準 6	学生支援
点検・評価項目(2)	6-2 学生への修学支援は適切に行われているか。
評価の視点	留年者および休・退学者の状況把握と対処の適切性
	補習・補充教育に関する支援体制とその実施

Ⅱ【点検・評価項目ごとの現状説明】

6-2	・2013 年度の進級合格率は 90%であった。退学及び除籍者(H25 年 4 月～H26 年 3 月 31 日)は、環境創造学部　27 名（1 年次 6 名、2 年次 11 名、3 年次 2 名、4 年次 8 名）であった。学部教授会では、ゼミナールを通して学生一人ひとりの学習支援と生活支援に細やかな配慮を心がけるように促している。 ・英語の授業や入門ゼミを通して、各担当教員が悩みを抱え問題のある学生等を把握し、東松山教務事務室及び学部事務室を通して常に状況を学部執行部が把握する形を取っており、問題のある学生については学科主任及び教務委員長が面談を行っている。また 9 月に卒業が難しいと思われる学生については、後期履修登録の際に同様に面談を実施している。また 2013 年度の後期から一部教員（19 人中 12 人）がオフィスアワーを開設した。 ・学生が使用するためにノートパソコン 15 台を板橋校舎のワーキングルーム I に設置した。OS は Windows と Mac の双方をインストールし、学生のニーズに応えている。 ・生態学の授業や実習において必要な実験器具や顕微鏡、分析装置の設置を進めている。東松山校舎生物学実習室に設置し、担当教員指導のもと、それらの機器を学生が随時使用できるように整備している。

【効果が上がっている事項】

6-2	・学生生活相談委員会では、留年者、休・退学者について、状況把握と対処について話し合われた。2014 年度入学者から、進級要件の単位数が引き上げられ、履修単位数の上限も設けられた。きめ細かな学生支援が行われるようになった。また学生生活相談委員会では、学生の自己責任として放任して良いのか、支援策を真剣に話し合い検討がおこなわれた。2012 年度退学者 18 名、2013 年の退学者は 27 名(2014 年 3 月）であった。 ・学生が使用できるノートパソコンを設置したことで、卒業論文やレポートの作成、ゼミでのプレゼンテーションに活用している。また、設置したノートパソコンには、画像処理ソフトをインストールし学生が使用できているため、学生の資料作成やプレゼンテーションのスキルが向上している。 ・平成 26 年度からは全教員がオフィスアワーを開設し、その効果を上げるように努力している。

【改善すべき事項】

6-2	学生によっては、主体的に取り組める地域貢献に活躍すると、大学の学びにモチベーションが上がるケースが多い。アクティブ・ラーニングの機会を増やし、全学生が卒業研究を仕上げた達成感と自信を持つ必要がある。

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

「９月卒業発表日の対応【９月７日（土)】」「後期に向けての履修相談について」(2013 年 9 月 2 日に宛てた 4 年生向けの文書)
・学部教授会議事録、ワーキングループ　・東松山校舎生物学実習室。

《指標データ》

データ集（表２５）　学部・学科の退学者数・退学率
（表２６）　学部・学科の留年者数・留年率
（表２７）　奨学金給付等状況
（表２８）　学生相談室・保健室の利用者数
（表２９）　学生自治会の構成員比率（母数は、在籍学生数）

Ⅲ　【達成目標】目標の進捗状況は、「S：完全に達成」　「A：概ね達成」　「B：やや不十分」　「C：不十分」　で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの		評価				
				2014	2015	2016	2017	2018
中期目標(2014 ～ 2018)	6-2 学生の退学率の減少 ・2013 年度の退学者は、20 名で、3 月に集中していた。保護者会の開催も視野にいれ、家庭環境の変化や就職支援などを積極的に行う体制を構築する。	退学率が 3%以内に抑えられている。	→					

14年度 目標	・学生の退学率の減少と検証 毎年、3月に退学を申し出る学生が多いことから、3月の時点で除籍者・留年者数を検証し、年間を通して退学率を下げる努力をする。特にゼミを担当する教員が、学生が友人関係や家族関係で悩んでいることなどにきめ細かい配慮を継続する。	・退学率が3%以内に抑えられている。	→	A				
	0 本学部の学びは、生活に密着した環境問題から問題を発見できる。全学生が興味ある事象に主体的な研究姿勢をもち、アクティブ・ラーニングに取り組む学習を支援する。決められた期日までに充実した卒業研究を仕上げたという達成感と自信を持つことができる。	全学生が、納得のいく卒業研究を完成させ、卒業研究発表会を通して学修の成果を発表する。主体的な研究姿勢をもてたかどうか、アンケートで項目を設け、検証する。	→	A				